

「やりたいことから求められることへ」 を意識して

日本病院薬剤師会理事
市立敦賀病院薬剤部長
荒木 隆一 Ryuichi ARAKI



このたび、地域医療委員会の委員長を拝命致しました。どうぞよろしくお願い致します。地域医療委員会とは、地域包括ケアシステムの構築と医療機能の分化・強化・連携が求められるなか、地域医療における諸課題の調査研究および企画立案を行う委員会です。病院診療所薬剤師としてどのような役割が果たせるのか、皆様方のご指導をいただきながらしっかり検討していきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願い致します。

これまで団塊の世代が75歳を迎える2025年を1つの大きな転換期として捉えていましたが、最近では2040年問題に関する議論が始まっています。その先の2050年頃には、本邦の総人口は1億人を割り高齢化率が40%に達し、生産年齢人口が50%を下回るとの試算がされています。今後の医療は、地域偏在と地域格差がますます拡大すると予測されます。すでに地方においては、商店街が寂れていき、銀行の合併や学校の統廃合など、生活を取り巻く環境も大きく変化しています。将来の日本は、全く別の国になるという覚悟をしたほうが良いようです。

一方、科学技術の面では、iPS細胞の臨床応用を始め、免疫チェックポイント阻害剤などの抗体製剤の相次ぐ開発など、高度薬物療法が進化してきています。急性期病院では、目まぐるしい進化への対応が迫られます。また、回復期・慢性期病院では、医療・介護のシームレスな提供体制の構築が必要です。認知症など、医療モデルだけでは解決できない問題も急増してきており、早急に社会全体での対応が迫られています。

このように、病院の機能分化が進むなか、機能や現場ニーズに応じた病院診療所薬剤師の役割を明確化する必要があります。各種システムを使った保険薬局との患者情報共有は必須であります。また、薬物療法プロトコルについては、施設内から地域への展開も必要です。そして、在宅薬物療法については、病院診療所薬剤師からの後方支援が必要であり、今後はさらに取り組みを強化していかなければなりません。近年、再入院を繰り返す患者が増加しています。ここで薬剤師は、真剣に患者の生活を考えたアプローチが必要です。今までの「治す医療」から、これからは「治し支える医療」へ、さらに「つなぐ医療」、「寄り添う医療」がまさに必要であり、我々に何ができるのか改めて考えなければなりません。

医療の専門化が進むなかで、我々は往々にして「やりたい医療」を先行して考えがちです。しかし、本来は「求められる医療」を提供する必要があるはずで、松田晋哉先生は、その著書のなかでドラッカーの考え方に触れ“我々は人の役に立つ仕事をしているという自負が強すぎると、往々にして自己中心的で一方的なサービスを提供しがちになり、顧客の支持を得られなくなってしまう”述べています（松田晋哉著『医療のなにかが問題なのか』勁草書房2013年）。心に留めておきたい言葉です。

最後に、「やりたいことから求められることへ」を常に意識しながら、患者の安心と満足を最優先する薬剤師として、多職種協働の文化を施設内から地域へと発展させなければならないということを、締めくくりとして述べたいと思います。